暴　力　の　問　題

棚田に水が張られ、蛙たちが声を出し始めた。山林の合間にそっと咲く山桜は実に清楚で、あれほど賑わった花見も鎮まり、田畑を耕し、野良仕事に精出す農夫たちは実に寡黙である。田畑の土手に咲くタンポポや菜の花、淡く萌え出る森の木々の足元には山吹がひときわ鮮やかに輝いている。あちこちで鶯が鳴くのどかな季節の到来である。

しかし、われわれの世界は何と暴力に満ちた世界であることか。世界中、実にいろいろなところで暴力が繰り広げられている。戦争、侵略、破壊、テロ、暗殺、殺生、環境破壊‥‥暴力行為はこうしたものばかりではない。心理的なもの、例えば黙殺、無視、洗脳、命令、条件付け、罵詈雑言、非難中傷、噂、陰口、思いこみ、自己主張、正当化や正義の名の下の暴力、あるべき姿による暴力。このように見ていくと、何と、この世界は暴力に充ち満ちていることであろうか。

そもそも、いかなる理由があろうとも、殺すという行為は全て暴力でなくて何であろうか。相手であろうが自分であろうが、武器、それも銃や爆弾ばかりではなく、自分が所有するあらゆる手段によって社会的、心理的に抹殺しようとする行為もまさしく暴力そのものであろう。

それ故、われわれの最大の問題は、この暴力の問題であろう。

暴力の根本は基本的には自他の葛藤にある。自他の葛藤とは、内面においてはあるべき自分とありのままの自分の分裂葛藤から、自分対他者、自分の家族対他の家族、自国対他国、自民族対他民族、さらには、政治的イデオロギーから宗教に到るまでの対立が抗争につながり、そこで展開されているのがあらゆる意味における暴力である。

暴力行為に意味を持たせるのは、自らを護るため、あるいは自らを脅かすものに対する防衛であり、ひいては対立者の完全抹殺によらねば自己の安全と繁栄は確保できないという恐怖心である。抹殺、暗殺、無差別殺人、自爆テロ、さらには拉致や誘拐に到るまで、その暴力行為を生み出す背景には自己の生命の安全と尊厳が脅かされ、危機にさらされるという恐怖心があり、その恐怖心が他者を危める暴力行為を生み出し、互いにその正当性を主張しつつ、際限なく暴力の応酬と連鎖が展開されている。

繰り返すが、暴力が抱える最大の問題は、すなわち自他の対立にともなう生命の危機にあり、その恐怖が際限のない暴力の応酬に発展する。自分の内部においても、また、自他の関係においても、あるいは、国家や民族、党派や宗派など個々人が銘々に同一化し依存しているものへの侵略や脅威に対する恐怖心が問題である。自己分裂、自他分裂に陥ったものが、ときには、自分の中に悪魔が住むといい、ときには自分以外はすべて悪魔だという。抑圧され、屈折した自他の疎外感が、この世界に対する激しいいきどおりとなって、腐った社会、間違った社会の粛正化をはかる。しかし、どんな高邁な正義の旗を掲げようと、深遠な神の御旗を掲げようと、自他分裂の未熟な自己疎外感に基づくものであるかぎり、それは暴力に過ぎない。歴史が何度も繰り返すように、自我の恐怖心が根底にあり、それが自ら奉ずるもの、対、それを奉じないもの、とのヒステリックな抗争に発展し、異端者、魔女狩りのような忌まわしく悲惨な大量殺人や破壊を実現してしまう。

果たして、われわれはこの毎日のように繰り返される暴力を直ちに終わらすことは可能であるのだろうか？　この悲惨な暴力を直ちになくすことができるのであろうか？　暴力を暴力で押さえること

はできても、暴力性が消えたわけではない。あるいは暴力に反対する非暴力の平和運動を繰り広げてたとしても、人々の持つ暴力性が終わったわけではない。

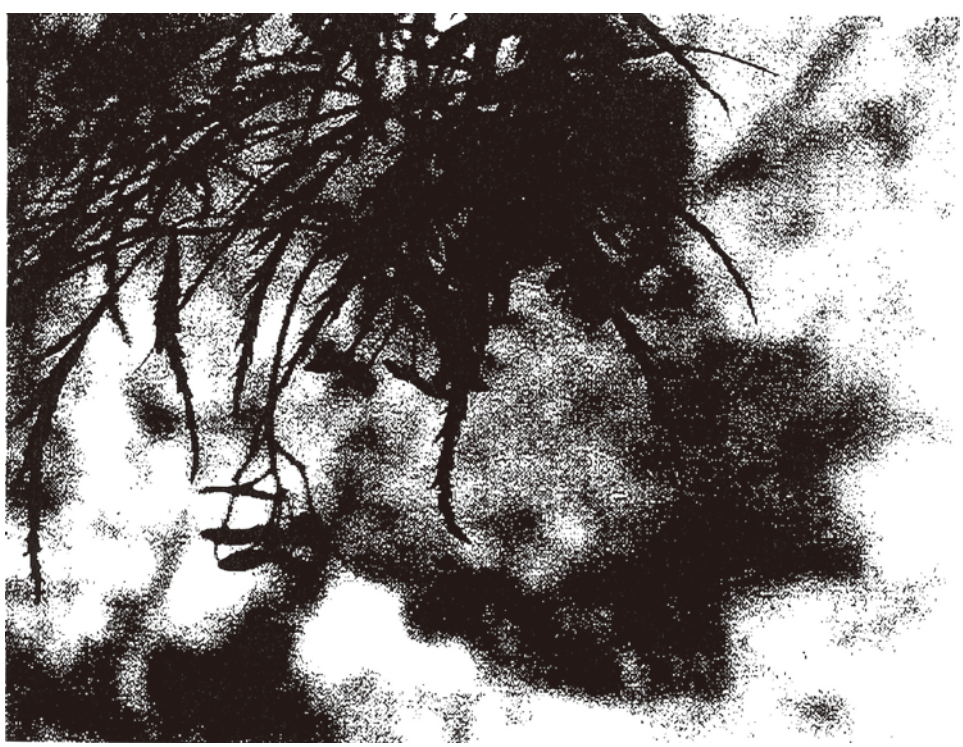
「いまさら、そんなこといったって、無理だね。これまで暴力がなかった時代は皆無だし、人はみな暴力的なんだ。だからこそ、安全と平和を維持するにはそれなりの監視とルールを確立して行くしかないのだよ」という。これが現実であるとするなら。我々はきわめて危険で劣悪な環境に生きているということになる。

しかし、恐れず、屈せず、自己欺瞞の偽善性に眩まず、しっかりと自他の暴力性に直面するならば、まさしく自他分離の疎外感そのものが暴力であることが理解できると思う。ということは、暴力は自他対立の疎外感であるが故に、暴力というものはどうしようもないというものなのではなく、まさに暴力そのものを終わらせることはまさしく可能であることを意味する。すなわち自他の確執、疎外感、恐怖心から解放されることこそが、暴力を終わらせ唯一のものであることだ。

では、自他の確執、疎外感や恐怖心からの解放は何によってもたらしうるのか。それは、個々のあらゆる生命が一なるものであることの自覚にほかならない。「あなたは世界であり、世界はあなたである」という識見に立ちうるか否かが最大の課題である。これは、まさにあなた自身が世界のありのままの姿を直視すること以外にない。悲惨なおぞましい暴力は決して他人事ではなく、まさしく自己の暴力性を直視するものこそが、暴力を終わらせる唯一のものである。

人がこの暴力の問題を直視し、暴力を直ちに終わらせることに真剣でなければ、どんな愛や正義や平和を掲げようとも、いとも簡単に暴力によって踏みにじられてしまうものである。この暴力の問題をあなたにも私にも真剣に問いたい。それが唯一暴力を終わらせるものであるから‥‥

萬歳楽山人　龍雲好久



慶徳総合経営センター㈱「心の通信」企画部発行